

○小嶋氏

皆様、こんばんは。ただ今、ご紹介を賜りました小嶋でございます。上青木の方で機械工場をやっておりまして、前は会議所の関係でいろいろ皆さん方に御指導いただいたんですが、今は機械屋の一おやじということで頑張っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

実は、総合政策課の押田さんの方からこういうようなお話をこの間、聞きまして、最初、総合計画審議会のときにお世話になったものですから、気楽に「いいですよ」と言ってしまったんですよね。その後、金井先生を初め、いろんなこの資料をいただきまして、まず金井先生の講演の原稿を見ましてびっくりしましてね、こんな難しいことを私はできないよっていうんで、よっぽどお断りしようかと思ったんですが、前にお世話になった義理があるものですから、とりあえず今日までできてしまったということでございます。

私も、機械屋の一おやじでございますから、皆さん方に理路整然とお話することは苦手でございます、それから生来、口が早口でございますから、非常に聞きとりにくいと思いますが、一応私の思っていること、あるいは今までこういうことがあったということについてお話しを申し上げ、そして、また皆さん方からいろんな御意見とか御質問があったら、それにお答えするような形で進めさせていただければ、今日の大役もある程度大丈夫なのかなというようなことで、お引き受けをさせていただきました。

特に、この自治基本条例というのは何かというんで、この金井先生の中に本当に非常にアカデミックに書かれておりまして、簡単に言いますと、やっぱり権利と義務の問題とか、もっとざっくりばらんに言えば、市民と住民とどう違うのかとかいうようなことも含めて、いろいろ金井先生がお話しされた。基本的に、市民の権利を保障するというのが一つと、2つ目は権力者へのいわゆる統制だと、3つ目には、中・長期的な視座でもって考えていかなきゃいけないというようなことを金井先生はお話しになったのかなと、こんなふうに思っております。

私も、行政とは前々から、本当に若いころから、いろいろ御指導いただいたり、あるいはおつき合いをさせていただいておりますので、かなり行政の皆さんとのおつき合いはあるんですが、今日はざっくりばらんにやっぱり川口の行政とこの産業界とのかかわり合いということについて、特に戦後どういうふうなものがあつたかということについて逐次お話しを申し上げて、そして皆さん方からまたいろいろ御意見を賜りたいと、こんなふうに考えております。

限られた時間でございますけれども、とりあえず私の最初、自己紹介、初めての方もおいでになりますので、自己紹介ということで、私は昭和33年に学校を出まして、実はうちが機械屋だったんですが、すぐやっぱり自分の工場に入るっていうことはよくないと、やっぱり世間勉強をして、社会勉強をしてから、それから世間の厳しいこ

とを味わった上で自分の工場に入った方がいいなということで、3年ばかりちょっとよそのものづくりのところに勤めました。これは当時二部上場の会社で、今はもちろん一部上場なんですけれども、鶴見にある信号をつくっているメーカーのところに3年間通いまして、36年にうちへ戻って、それからずっと機械屋をやっているわけでございます。おやじが早いうちから、昔の職人上がりのおやじでございますから、ものをつくること、あるいは新しいことを考えることは非常に得意なんですけれども、そろばん勘定が苦手でございます。後からも話が出ますけれども、昔の鋳物屋さん、機械屋さんっていうのは、ものをつくることは上手だったんですが、そろばん勘定は非常に弱いということの典型的な代表みたいなうちのおやじでございます。すぐにハンコとすべてを預かっちゃいまして、そんなことでずっとやってまいりました。

会社の方は、実はおじいさんが大正6年にかじ屋をやっていたんですね。当時のかじ屋っていうのは今の鍛造屋さんの御先祖様みたいなものなんですけれども、当時、本当にこの刀をやる刀かじと同じで、火づくりをして、それを手でハンマーで打つというようなこと、簡単なかじ屋だったんです。うちのおやじが学校を出てすぐに、学校といっても、当時ですから、小学校しか出てませんので、学校を出てすぐおやじの仕事を手伝ったんですが、いつまでもこんなかじ屋をやってたんじゃ将来わからないというようなことから、自分で勉強して、自分で本を買って、自分でその金をためて、機械を1台買ったんですね。これが昭和の3年ごろだったというふうに聞いております。それで、機械屋に変わったわけです。これが私の会社の機械屋の一番のもとでございます。戦争前はいわゆる鋳物屋さんの機械加工をやっておりました。

そばに結構、鋳物屋さんがありました。当時、私のところは金山町っていう一番網走番外地みたいなところに住んでいたわけでございますけれども、当時、鋳物屋さんがあつた狭い金山町という地区に34軒ありました。残念ながら今は1軒しかないんですね。それから、お隣の本町一丁目にも結構、鋳物屋さんがありました。今は1軒しかないんです。それから、善光寺道路を挟んで寿町というまち、今は川口一丁目とか二丁目になってますが、そこにも鋳物さんがやっぱり20何軒ありました。そこも今は1軒しかないんです、鋳物工場が。後ほどまた話が出てくるとは思いますけれども、そんなような中で育ってまいりまして、近くの鋳物屋さんの加工、鋳物さんがそのままなかなか納めることができない品物がありましたので、機械加工を手伝っておりました。もちろん戦争中は軍需生産のお手伝いということで軍需関係の仕事をやり、戦後はやっぱり食べ物のない時代でしたから、まずは鍋とか釜とか、それから当時製粉機とか精米機とか製めん機というのがあったんですね。いわゆるお米を精米する機械だとか、それから小麦を粉にする製粉機、それからうどんをつくる製めん機という機械、そのころはそういうような機械がはやりまして、そのいわゆるものづくりを始めました。

ところが、そのうち今度はだんだんいろんなよそからも仕事が入ってまいりまして、

一番はやったのがいわゆるタイヤ更生機っていうやつなんですね。当時、戦後で車があんまりなかったんですけれども、同時にゴムなんか当然入ってきません。タイヤが減っちゃうと困っちゃうので、その減ったタイヤに溝を入れる機械ですね、それを東京のある商社が考えて、うちへどうだっていうんで、うちのおやじが何とかやりました。ようっていうんで、それをつくりまして、それが大当たりに当たって、もうタイヤが、すぐ減っちゃいますから、その焼きつけをしなくちゃいけないっていうんで、その機械がもうつくれば売れるというような感じで、かなり売れました。たしか前々回でしたか、元の永瀬洋治市長さんのお話の中で、私の名前が出てきておりました。私もその議事録を見たんですけれども、南京袋の中にお金を詰め込んだぐらい忙しかったと、当時は。当時、まさにそのころだったと思うんですね。もちろん、古いお金っていうか、あそこ新円が出ましたので、大きい札がないから、細かい札をいっぱい詰めたりなんかということのあらわれだったと思いますけど、とにかく、そういうタイヤ更生機がはりました。

それももちろんひとりのブームですから、そのうちやっぱりゴムがどんどん入ってくるようになれば、もうそんな機械なんか要らなくて、新しいタイヤを買った方が安いわけですから、その後は今度ストーブをうちはつくりました。うちのおやじは、さっき申し上げたように、とにかく何か新しいことを考えることが好きで、人の機械を見ては、ああ、ここがおかしいよと思うと、全部自分でそれをつくっちゃうということで、グラインダーっていうのは、御承知のように、例えば鋳物屋さんでこういう鋳物を吹きますと、これを磨くわけですね、研磨するわけです。その砥石をつけて回すのがグラインダーなんですけど、ところが前のグラインダーっていうのは、砥石が1個しかついてないんです。最初に粗引きをして、その後、仕上げをすると、また砥石を変えなくちゃいけないという、そういう手間が、おやじが見てて、おかしいじゃないかと。じゃ、グラインダーをいわゆる両方に2つ、砥石をつければいいじゃないかということで、2つの砥石をつけるグラインダーを発明しましてね、これがまた川口の鋳物屋さんで結構売れました。ただ、これは結構丈夫な品物ですから、一たん売れちゃうと、なかなか、もうすぐ終わっちゃうんですね。

それから、ストーブも、当時ダルマストーブとか、いろんなストーブがありまして、上から燃料をくべると、全部燃えちゃうわけですね、石炭が。くべるだけ、赤くなって燃えちゃう。と、もう石炭がむだになっちゃうとか、熱いんだけど、すぐまた石炭が足りなくなっちゃうっていうんで、これもやっぱり貯炭式にしよう。石炭を上から入れて、ある程度貯炭でたまっていて、下の方だけが燃えるようなストーブを考えたんですね。貯炭式っていうストーブなんです。これは当時フクロクさんとか、いろんなところで結構いろんなストーブがありました。これはもう薪でも何でも、くべれば全部燃えちゃうやつなんですけど、貯炭式というのは、石炭を詰めておくと、下から順番に燃えて、燃えたかすが落ちると、上から石炭が落ちるという格好でね。

貯炭式っていうんで、これが結構売れたんです。そんなことをずっとやってまいりました。

ただ、それもやっぱりすぐよそがまねしてしまうので、そのうちに今度、当時アマダさんの、今はもうアマダさんというと、世界の一流の会社ですけども、当時アマダさんのノコ盤っていうのがやっぱりはやりましてね、あれも非常にアマダさんが考えたいいアイデアなんですね。昔、ノコ盤っていうのは、これまた専門的な話になっちゃうんですが、機械のノコ盤っていうのはこの刃のついたノコをこうやって切るわけですね。そうすると、簡単に言えば、半分遊んでいるわけです。例えば、こっちで切っているときは、こっちは遊びなんです。動いててね、機械が。3時間動いてると、1時間半しか仕事をしてない。おやじがそれはちょっとおかしいじゃねえかと言っているうちに、アマダさんがいわゆるノコ盤って、ぐるぐるぐるぐる回るノコ盤ですね、あれを考えたんですね。そうすると、3時間やれば、3時間仕事をするわけです。その機械のメーンの部品を全部うちで加工したんです。これがまたノコ盤っていうのは、これ結構ほかにはないんで、例えばこういうところを加工するのに、プレーナーっていう機械で削るわけですね。そうすると、やっぱり刃物でばちっと削っていて、戻るときは遊んでいるわけです。この辺行くと、ほとんど遊んでいるわけですね。例えばこれが5分かかる仕事であれば、そのうちの30秒ぐらいしか仕事をしない。あとは遊んじゃっているわけです。こういうのはものすごく大きいんです、アマダさんのノコ盤っていうのは。そうすると、例えば5時間かかる仕事のうちの9割が遊んじゃっているわけです。これはおかしいと。それで、うちのおやじが考えたのは、フライス盤っていう機械があって、そのフライス盤のユニットをここへくっつけて、このとおりに加工したらどうかということをプレーナーに取りつけようということを考えたんです。ですから、それこそさっきのと同じで、ともかくかかっている時間だけ全部仕事をしてもらおうと、機械に。そういうことを考えまして、バーチカルユニット付きいわゆるプレーナーということを考えたんです。これが当時工作機械ブームで、もう売れに売れて、前金はどんどん入ってくる、もう大変だったんですね。これが昭和30年代やっておりました。

ところが、これがまた途中からだんだんだんだん進歩してきまして、いわゆるコンピューターつきになってきたわけです、いわゆる汎用機じゃなくて。コンピューターつきの機械があちこちあらわれました。まず、旋盤がNC旋盤になった。それから、フライス盤がNCのフライスになった。と同時に、プレーナーというのは結構大きな機械なんですけれども、それにもいわゆるNC装置付きということが始めたんですね。これが昭和40年の後半ぐらいだったですかね。そんなこともあって、これはとてもじゃない、やっていけないというんで、最終的にはそのプレーナーも売れに売れたんですけれども、だんだん収縮してやめてしまったんですね。

それから、じゃ何をしたかっていうんですが、その間に、うちは昔は鋳物製品の加

工から始めてましたから、とにかく自分の製品があったときも、ずっと下請けの仕事は続けておりました、忙しくても。それがやっぱりプレーナーがもうだめだというときに、いわゆる初めて生きてきましてね、プレーナーやめても、いわゆる食べるだけの仕事は常にあったわけです。そこへもってきて、後に話が出ますが、当時はやりました、当時っていうか、もっとずっと後になってはやりました、異業種交流というのがはやりました。これはいわゆるバブルが崩壊してから、とにかく機械屋は機械屋だけ、鋳物屋さんは鋳物屋さんだけで、同じものづくりのまちの中でも、それでやってはなかなかいけないということから、せっかく川口はいろんな業種が集まった、いわゆる集中的な工場のもので、ものづくりのまちであるから、だから異業種の交流をしようということで、異業種交流が始まったんですね。これはもうずっと後なんですけれども。ところが、うちはその前から、もう本当にこのプレーナーをつくっているときから、鋳物屋さんとか、機械工具屋さんとか、木型屋さんとかとの異業種交流をずっと続けたわけです。

といいますのは、私のところはもちろん製品をつくっているときは鋳物屋さんに鋳物を頼みます。それから、当然木型屋さんに木型を頼むわけです。それから、工具屋さんから工具を買います。そんなことで交流があるわけですね。逆に、今度、鋳物屋さんから加工も頼まれているわけです。そうすると、鋳物さんが、実は小嶋さん、こういうところにいいお客さんがあるよというのを紹介してくれるわけです。うちはうちで逆に、こういうところのうちは機械を納めたから、ここに鋳物をつくるというあれがあるよと、だから鋳物屋さん、行ってごらんないというようなことを続けたわけです。そのために、鋳物屋さんから紹介されたお客さん、それから、うちが逆に鋳物屋さんにお客さんを紹介すると。工具屋さんもそうですね。いろんなところに入ってますから、実は小嶋さん、こういうところにこういう仕事をやってるよということを紹介してもらうわけです。そして、そこへ、「工具屋さんから頼まれました」と言っ、そこから仕事をもらうとか。逆に、今度、そこに仕事を出すとか、そういう異業種交流をやってきました。これが正直言っ、うちの会社の強味だったというふうに思うんですね。

ですから、同じ下請け的な仕事をやっていても、当時は本田さんがメインだったんですね。だから、自動車関係をやりました。それから、物づくりのいわゆる工作機械の関係もありました。それから、産業機械もありました。それから、特殊なところで鉄道関係の仕事もありました。というようことで、非常に業種が広がった。そのために、当時は何回も繰り返しの波があったんですね、景気の波が。そのたびに、どこかよくて、どこかが悪いんですね。全部が悪くなるっていうのは恐らくバブルが崩壊してからだったと思いますね。それまではAさん、Bさんという会社が業績が悪くなっても、Cさん、Dさんの会社がよかったり、それからEさん、Fさんがまあまあだったりということがあつた程度続きましたね。そういう意味で、私のところはまあまあお

かげさまでいわゆる倒産ということがなく、いろんな不況を乗り切ってきたのかなと、こんなふうに考えております。

これは川口の機械屋の中でも、今、生き残っている機械屋さんがかなりやっぱりそういうことをやっていると思うんですよ。これが川口のものづくりが集まっている一つの大きな利点だろうと、こんなふうに思います。

うちの会社の自己紹介はそのぐらいにしまして、それから、業界としては、私は機械組合にももちろん昭和36年にうちの会社に戻ったときに、すぐやっぱり機械組合の仕事に入りましたので、昭和47年ぐらいから理事をやったり、それから常任理事、委員長をやったり、あるいは副理事長をやったりして、最終的には平成8年にいわゆる理事長を受けたということで、6年間理事長をさせていただきました。それから、会議所の方は、組合の理事をやってすぐにやっぱり会議所のいわゆる常議員になりまして、それからずっと常議員をやっていて、平成13年ですね、副会頭になって、6年間副会頭をやって、去年、任期満了ということで副会頭を退任しました。そういうようないきさつがあるわけでございます。

そんな中で、私どもはものづくりにずっと専念したわけでございまして、最初の自己紹介はそのぐらいにさせていただいて、その後、この間、事務局からというか、金井先生の方からのお話だったと思うんですけど、今日、話すことの要点が3つぐらいあります。そのうちの第1番目が戦後の川口市政における産業界の役割ということでございますので、その辺についてちょっとお話を申し上げます。

まず、昭和21年に新憲法ができたわけですね。そのときの川口の人口が10万人。それから、さっき申し上げた戦後の混乱がかなり続きました。その当時、鋳物屋さん、機械屋っていうのは結構あったわけです。そんな中で、昭和22年に大野市長さんになったわけですが、その当時、鋳物屋さんの中で小林英三さんが参議院議員になりました。それから、県議員には佐山さんとか高橋八郎さんという方がなりました。それから、市議員さんは当時36人だったんですね、定員がね。その中で鋳物屋さんが15人、機械屋が3人、だから半分がいわゆるものづくりの市議員さんだったんですね。そんなようなことがありました。

それから、昭和29年に西川口の駅ができて、それから西川口近辺がいろんな面で変わってきたわけですね。その前に、さっき申し上げた、川口の鋳物、機械屋さんっていうのは非常に景気の波が大きかったんです。ただ、3年ぐらい景気がよくって2年ぐらい不景気が続くというような、こういう波だったんですね。ですから、多少不景気でもちょっと我慢すれば、また景気がよくなるということの連続でありましたので、その辺は各鋳物さんのいわゆる社長さん、当時はおやじさんって言ってましたけれども、おやじさん方もよくわかっておりまして、多少不景気のときに我慢すれば、すぐ景気がよくなるんだというようなことがあったというふうに思います。

その一つが、昭和25年に朝鮮動乱があったんですよ。この当時、またものすごく鋳

物屋さんが景気がよくて、ものをつくればどんどん売れちゃうという。戦争っていうのは大体物が壊れますから、どうしてもものの需要がふえるということがありますので、この朝鮮動乱景気っていうのがありました。

それから、その後、さっき申し上げたように、田中徳太郎さんが市長さんやられたり、高石さんが市長さんやられたんですけれども、32年からまた大野さんが市長をやられてまして、それで当時、34年がいわゆる岩戸景気という景気があったわけですね。朝鮮動乱よりももっといい景気がありました。ところが、40年にベトナム戦争があったんです。その当時、人口が23万7,000人ぐらい。そのすぐ明くる年、また、いざなぎ景気というのがあって、岩戸景気以上に景気がよかったという。俗に言う、こういう景気の波がありました。

ところが、昭和40年代から、いわゆる公害問題というのが出てまいりましてね、確かに鋳物屋さんは景気よかった、あるいは機械屋も結構機械をどんどん動かして残業もやったということもあるんですけれども、やっぱり鋳物屋さんの粉じんの問題、それから機械屋の騒音、振動、それからさらには鋳物屋さんのにおいとかね、そういう問題が結構うるさくなってきた時代が昭和40年代だったのかなと、こんなふうに今思っております。

例の「キューポラのある街」という映画ができたのが昭和37年だったんです。今、「母べえ」がこれから盛んになると思いますけれども。そんなことがあったと思います。そうこうしているうちに、45年に万博がありました。このときもまあまあ景気はよかったんですね、万博もね。48年にオイルショックがあったんです。ですから、万博が終わった後、オイルショックで一気に景気が冷え込んだんですね。でも、何とか日本人の、特にものづくりの体質がやっぱりこう、そういうものになれているっていうのがありましたので、オイルショックも何となくクリアしていきまして、昭和50年には人口が33万6,000人だったんです。これは川口の人口ですね。

ところが、このオイルショックがやっぱりそのころになってようやくじわりじわりと効いてきてましてね、鋳物が一番不景気だったのはやっぱり昭和50年ぐらいなんです。そのときに鋳物組合で産業会館の上で不況突破大会というのをやりましてね、これがまた当時、市長さんも含めて、何とかこれはしなくちゃいけないということでやって、いくらか持ち直したところが、昭和54年に今度は第2次のオイルショックがあったんです。これがまたかなり響きまして、鋳物屋さんの中でも結構、倒産したり、あとは鋳物をやめるところが出てまいりました。そんなかんだしているうちに、永瀬市長さんが今度昭和56年に市長さんになりました。後ほど、また細かいことは申し上げますけれども、人口がだんだんふえてまいりまして、平成の初めには人口40万、18年にはとうとう50万になったというようなことがいわゆる市政だったというふうに思います。

当時は、やっぱりこの産業界の役割というのは、何とか我々産業界があつて、この

川口のまちが景気よくなったり、あるいは商店も賑わうんだというようなプライドがありましたので、多少の不景気でも我慢して、とにかく頑張ってもものづくりをやろうというような役割だったというふうに思います。歴代の市長さんを見てまいりますとね、もちろん大野さんは何度もやりましたけれども、高石さんも何回かやりましたけれども、人間、人間と言っちゃ大変失礼な言い方なんですけれども、10人がですね、今まで市長さんの、何人かと言うと、今の岡村市長さんは10人目なんです。そのうち6人が鋳物屋さんなんです。それから、1人が鋳物のいわゆる問屋さんなんです。だから、鋳物関連が7人、10人中。それから、会議所の会頭さんっていうのが、今の細野会頭がやっぱり9人目なんです。そのうちの驚くなかれ7人が鋳物屋さんなんです。ですから、市長さんも、それから会議所の会頭さんも、いかに鋳物産業につながりがあったかということが言えるのかなと、こんなふうに思います。

これは後ほども出てまいりますけれども、当時、川口の鋳物屋さん、要するに鋳物組合というのができたのは明治38年ですから、ついこの間100周年をやりました。一番多かったときには、昭和40年代が650軒ぐらい鋳物屋さんがあったんですね。ところが、だんだん、さっき申し上げたように、何回かの不況、それからいろんな問題がありまして、昭和50年代には330社に減ってしまい、平成7年には230社に減ってしまって、現在どうかっていうと、鋳物組合さんの組合員数は恐らく100数社ぐらいだろうと思うんです。ただ、実際に湯を溶かして鋳物をつくっている企業は70軒ぐらいしかないと思うんですね。ですから、最盛期の1割しか今、鉄を溶かして湯を出していないというところだと思います。

一方、機械屋っていうのは30年ぐらいおくれてできましたので、ちょうど私と同じ年なんです。昭和9年に組合ができました。そのとき130社なんです、組合員数が。これがだんだんふえてきて、昭和22年、戦後すぐには240社になったんです。ところが、やっぱり何回もくぐっているうちに、減ったり増えてたりして、一番多かったのは昭和39年に300社になりました。それから、ずっと300社の近辺を行ったり来たりしまして、大体330ぐらいで昭和51年からずっと頑張ってきたんですが、私が理事長をやめる前の理事長さんのときから、だんだんじり貧に減ってまいりまして、現在は210社の組合員数です。ただ、鋳物屋さんと違って、組合員数が210っていうことは全部稼働しております。機械組合の場合には全部稼働してます。そんなような状況が今、続いております。

それで、それから、ここには川口市政の実力者はどこにいたのかっていう項目があったんですけどね、これちょっと私にはわからないので、これはまた後ほど皆さん方の御意見とかの中で議論していただければと思います。

それから、その前に、川口市政は川口自民党を指導してきたのかなんていう恐れ多い言葉が出ておりますけれども、これはまさにそんなことはないんです。ただ、当時、さっき申し上げたように、自民党の市議員さんが結構、鋳物屋さんとか機械屋さん

が多かったということがありますのでね、これは指導したとか何とかじゃなくて、議員さんがやっぱり鋳物屋さんとか我々機械屋の状況をよく把握しておりますから、そういう意味ではいろんな発言をしてくれたのかなということは言えると思います。決してこれが我々産業界が、指導したとか、そんな大それた話ではなくて、やっぱり鋳物あるいは機械関係の議員さんが多かったもんですから、実情をよく知っているということで、いろんな議会の中でも提案をしていただいたり、あるいはかなり議論をしていただいたのかなと、こんなふうに思っております。

それで、時間の関係もありますので、2番目の川口市の産業界の活動の特徴ということでございますけれども、まず、何といても、やっぱり歴代の市長さんが鋳物関係が多かったもんですから、やっぱり業界と、さっき申し上げた業種組合、特に業種組合と市と、それから市の議会、これがよく連携していただいていたのかなというふうに私ども、ありがたく思っております。例えば市長さんもかなりやっぱりものづくりに力を入れてくれた、市議会もその辺は大変御理解があったから、いろんな面でやっぱり我々業界にとっては非常にプラスになった点が多かったのかなと、こんなふうに思います。

当時、一番私ども、今でも覚えているのは、労使問題協議会というのがありましてね、これは大野さんのときにできたものですが、まさに労使が一体となってやっていたかなければ、この川口のまちの中はうまくいかないんだというようなことで、労使問題協議会とか、あるいは労政審議会とか、あるいはマスタープランという総合計画審議会の中にも、結構我々若いときにも委員として参加させてもらった経験があります。鋳物関係からも児玉さんも出ておりました。そんなことで、鋳物、機械の代表が結構そういうところに出させていただいて、やっぱり業界の要望っていうか、あるいは悩みっていうか、注文っていうか、そういうものを聞いていただいたということが私ども結構、産業界にとってはありがたかったなと、こんなふうに思っております。

特に、従業員対策として、やっぱり川口産業文化会館っていうのがありまして、あそこに特に、大野さんのときに従業員の宿舎をつくっていただきましたし、それから川口市では、ほかの市ではない職業訓練校、県ではあったんですけど、川口市として職業訓練校をつくってもらったわけですね。そういうこともありました。それから、特産品の展示会ということなんか、昭和23年からもう始めていただいたんですね。こういうことなんかも、やはりものづくりのまちらしくてね、やっぱり市長さん、あるいは議会の御理解があったのかなと、こんなふうにも考えております。それから、中小企業共済協会とか、金融関係とか、そういうこともございました。それと、特にやっぱり人の問題で、川口の雇用対策協議会とか、雇用対策委員会というものに特に力を入れていただきました。

それともう一つ、やっぱり川口市退職金共済制度、要するに川口の鋳物屋さんとか機械屋っていうのは非常に体質が弱いと、お金に関しては非常に弱いものがあって、

せっかく一生懸命働いている従業員に退職金も払えないと、これはまずいよということから、大野さんがやっぱりこれは何とか退職金共済制度をつくろうと。当時、国には中退共というのがありました。中小企業退職金共済制度がありました。これに倣って、川口市独自の川口市退職金共済制度をつくってもらいました。これが今でも生きております。今は勤労福祉サービスセンターというところで、産業文化会館の中にもありまして、そこで今でもこれは活躍をされておりますけれども、そんなこともやっていただきました。

それから、もう一つ、大野さんのときにやっぱりありがたかったのは、これからは何ていったって若手の経営者が頑張ってもらわなくちゃいけないと、そのためには今のおやじさん方の背中を見て、まねしてやるのもいいけれども、若手は若手らしくやっぱり勉強していかなくちゃいけないんだということで、勉強会をつくってもらったんですね。これ昭和35年に機械研究会と鋳物研究会。鋳物研っていうやつと、機械研っていうやつです。これは特にありがたかったのは、木型とかいろんな業種組合ありましたが、特に機械研と鋳物研をつくっていただきました、昭和35年から。これが今でも続いております。途中からやっぱりこれは鋳物、機械だけではいけないということから、木型とか、あるいは農業関係とか、あるいは各業種団体組合の団地ですね、例えば新郷の工業団地だとか、あるいは南平の工業団地だとか、そういうところの若手もこういったものをつくりました。これはものすごく今に役立っているんじゃないかなと、こんなふうに考えております。

それから、次に、商工会議所のリーダーシップの所在と有力者の経歴ということがありますけれども、会頭はさっき申し上げたとおりです。現在は正副会頭と幹事で8人いるんですが、その中で鋳物関係は3人だけです。それから、常議員というのは36人いるんですが、その中で鋳物は5人、機械が5人です。それから、議員さんっていうのがまた69名いるんですが、その中で鋳物屋さんが9名、機械屋さんが、ここちょっと多いんですけど、議員が14人ということになっております。ですから、やはり会議所ですから、鋳物、機械関係が相変わらずまだまだ多いということが言えるかと思います。

川口商工会議所のリーダーシップの所在と有力者の経歴ということですが、経歴はともかくとして、川口商工会議所が、永瀬市長さんの時代に、今から20年前になると思いますけれども、川口市のまちづくりについての提言というのを市長さんにやったことがあるんです。これは21世紀に向けて新産業文化都市をということで、メインテーマはそうですね、目標としては、県南5市の連携をさらに強めて、首都東京の北の玄関口として、流通情報ターミナル基地を構築するということが目標だったわけですね。さらに、政令指定都市を目指しましょう、そして自立自衛のできる副都心を目指してと、それから地の利を生かした特徴ある個性的な経済文化圏を構築するというのも提言をいたしました。そして、実現可能な都市づくりの方向性としては、ま

ず新工業都市であること、それからインテリジェントビジネス都市であること、そして流通情報都市であること、さらには文化スポーツ都市であり、大規模樹園都市、そして新住宅都市というようなことを、私どもの実現可能な都市づくりの方向性として提言をしたわけでございます。

推進の要領としては、そのためになすべき事柄として、やっぱりまちづくりのアクセスポイントというものは必要でございますから、それを5点申し上げました。まず、市民の意識を高めるということ。それから、官・民・学・産の研究機関をつくるということ。それから、先鞭をつけるための公社、第三セクターの活用をする。そしてさらには、会議所だけではなくて、外部スタッフを活用するということ。そして、中央官庁との強力なパイプづくりを進める。これはいわゆる国会に議員さんを送ろうということも含めて、そういう意味の中央官庁との強力なパイプづくりを進めるという、こういう推進要領をもって、永瀬市長さんに川口市のまちづくりについての提言を20年前にいたしました。これが商工会議所の活動の一つでございます。

さらに、平成4年にはSKIP研究会、今のSKIPですね、当時はSIBP研究会って言いました。当時、土屋知事さんが川口のNHKの跡地にやっぱりものづくりの拠点をつくろうということで、埼玉インダストリアルビジネスパークという、SIBPだったんですね、それをSKIP、埼玉・川口インテリジェントパークという、そういうふうに変えまして、研究会をつくりました。6年には、さっき申し上げた異業種交流プラザ、さっきの異業種交流をもっと組織化しようというんで、会議所に異業種交流プラザというのをつくりました。そして、平成8年には、例の彩の国工場、これは県で始めたことなんですが、その認定事業を川口の商工会議所が窓口になって、川口からどんどん推薦をして、現在は50社ぐらいになってますかね、この認定を受けてる工場が。

それから、平成14年には、これ大分新しくなります。これはもちろん岡村市長さんの時代になりますけれども、関東経産局からの話で、東葛・川口地域の新産業創出推進ネットワークという、これは関東経産局が始めた産業クラスター制度というのがあるんですね。要するに、産業が集中しているところに、クラスター制度といって、新しい産業をつくろうじゃないかというんで、このうちの一つがこの東葛と川口の地域でございます。これが関東経産局が始めたものを私どもの商工会議所が受けて、これをやりました。現在はこれにつくばが入っております。東葛・川口・つくば地域というふうに今、入っております。これはまだ今でも続いております。これは10年以上かけてやる大きな仕事です。

それで、その中の仕事を、ちょっと時間がなくなりましたので、これはちょっと割愛します。後ほど、また質問があれば、どういうことをやっているかということについては、後で御説明申し上げます。

平成18年には、産業観光化事業というのがあるんです。これもやはり商工会議所が

国からの補助を受けて、とにかく産業だけではなかなか栄えていけないので、産業を観光化することによって、市民の皆様にもわかってもらう、後ほど出てくると思いますが、新しい新市民の皆さんにも川口のまちが実はこういうものがあるんだよということがわかるということで、とりあえず鋳物と植木、この2つを産業観光化しようという事業を18年から始めました。これは今でもやっております。

それから、去年から始めたものにつきましては、これはやっぱり国の文科省と経産省の2つの事業なんです。珍しく縦割り行政ではなくて、2つの省の事業なんです、ものづくり人材育成のための専門高校と地域産業連携推進事業という長い名前なんです、簡単にはクラフトマン21ということで、とにかくこれは高校生を対象に、いわゆるインターンシップをやろうと。そして、今の高校生にものづくりのよさを知ってもらって、できればものづくりにこれから就職してもらおうということも含めて、ものづくり人材育成ということ、これは去年から始めております。これは経産省と文科省の国の仕事でございます。

それから、次に、それでは市の中小企業対策など産業政策への評価についてを申し上げたいと思います。これも、まず大野市政のときのことなんです、これもたくさんありますが、さっき申し上げた高等職業訓練校、これ昭和34年につくっていただきまして、20年間続きました。それから、若手経営者の育成ということで、昭和35年に鋳物研、機械研をつくってもらいました。そして、労使問題協議会とか、いろんなことをやっていただきました。

私は、今でも一番印象に残っているのは、私ども若い、当時、私もまだ30代だったんですけども、30代の若い代表を集めていただきまして、これからの理想的な川口の将来像を描けというふうに言われて、一つは、鋳物工場の将来像として、いわゆる集約型工場をつくれと言われてまして、図面をつくらされたんです。私、今でも覚えているのは、真ん中にキューポラがあって、10個ぐらいの会社とその周りがあるんですね。そういう一つの大きな工場なんです。ですから、銑鉄は毎日溶かしているんです。各会社がそれぞれその湯を買って、そういった集約的な工場をやれば、今で言う、工場アパートなんです、いわゆる能率的に非常に合理的な鋳物工場ができるんじゃないのかということをお願いした覚えがあります。

それから、もう一つは、将来像の都市ということで、高速道路が通ったり、モノレールが通ったり、地下鉄が通ったり、そんなような絵をかいた覚えがあります。これも大野さんのときに、大野さんのところに出してありますから、残っているかどうかわかりませんが、そんなことを我々、鋳物関係、機械関係、木型関係あるいは商業関係の若い連中が集まってやった覚えがありました。

それから、続けてまた次の話ですけども、保証業務関係で川口市中小企業共済協会というものを大野さんにつくってもらったんです。これは当時、県の保証協会が非常に保証料が高いということで、私ども川口の中小企業はお金を借りるにしても余計

な利息を払わなければ、保証料を払わなければ、お金を借りれないということがあったので、それじゃもっと安く借りられるように保証をもっと安くしようというんで、川口市中小企業共済協会というのをつくっていただきました。この目的も幾つかあるんですが、これも長くなっちゃいますから割愛いたします。

それから、従業員の福祉対策として、さっき申し上げた中退共の制度をつくってもらいましたし、あるいは住宅資金の融資のあっせんとか、あるいは勤労者住宅の建設だとかということもやってもらいました。

それから、もう一つは、昭和53年に産業振興公社をつくっていただきまして、海外の市場調査、新製品の開発、特許の相談あるいは輸出入の業務代行というようなことをやって、当時は、最初、海外へものを売ろうということだったんです。視察に行ったんですが、行ったら、逆にこれはものは売れないよと、逆に輸入しようということになりまして、これは鋳物関係に絡んでですが、原材料の購入ということで、安いブラジル銑鉄を入れるということがしばらく続いたわけでございます。これは議会でもかなりいろいろ議論されたことだろうというふうに思いますけれども。

それから、住工混在の解消ということで、地域指定をいたしまして、駅の周辺は商業地域、それから、その周りが住宅地域。駅周辺にあった工場等は準工とか、あるいは工業専用地域に移れということで、南平工業団地が昭和44年にでき、新郷工業団地が昭和45年にできました。ということで、駅前にあった鋳物屋さんがほとんどなくなってしまったということが言えるのかなと、こんなふうに思います。

次に、永瀬市政のときでございますけれども、このときは「人と自然と産業の調和した新産業文化都市」ということをキャッチフレーズにやりました。まず、マスタープランを昭和61年につくられたときのいわゆる産業政策のあるべき姿ということで、さっき申し上げたような、都市型工業の育成だとか、魅力ある商業の育成ということがまず言われました。これが特に永瀬市政の一つの大きな産業政策だったと思います。

それから、56年には川口の緑町の集団工場ができました。そして、各種の資金融資がありました。これは当時やっぱり不況が続いたり、景気がよくなったり悪くなったりした連続がありましたので、その不況のたびに、中小企業近代化融資だとか、産業構造高度化融資だとか、緊急不況対策融資だとか、最後はもうどうしようもなくなって、頑張りつなぎ資金というようなことで、これは議会へ出すときに、同じ融資制度だと、なかなか議会が「うん」と言ってくれないというようなことがあるんだと思いますけれども、名前を変えて、その都度いろんなことをやっていただきました。

平成のときにバブルが崩壊して、それからもうかなり厳しくなったわけでございますけれども、その前に、さっきちょっと申し上げたニューディール作戦というのを昭和62年に永瀬市政のときにやっていただきました。これは川口の中の公共鋳物、できるだけ各都市のいわゆる公共鋳物として使ってもらおうという。鋳物屋さんはものをつくるのは上手ですが、ものを売ることは下手だったもんですから、その販路拡大と

いうことで、かなり市が力を入れていただきました。このときの議会の方々に大変お世話になって、本当に川口の鋳物業界としてはいわゆる九死に一生を得たのかなと、こんなふうに思っております。

それから、永瀬市政のときに、また大きな一つの出来事としては、総合文化センター「リリア」ができたんですね。ただし、このとき、私どもはものすごくがっかりしたことがあるんです。というのは、川口のまちは産業のまちなんだから、少なくとも産業の博物館をつくってほしいということを昭和61年のマスタープランのときに申し上げたんです。いろんなことでお金が足りないとか、いろんなことがあるのならば、せめて資料館でもいいからつくってくれということを申し上げて、このリリアをつくる時のやっぱり事前にいろんな協議があった中でも申し上げたんですが、最終的にはとうとう機械の展示場ができなかったということで、私どもは個人的にというか、機械業としては残念に思っておりますが、総合文化センターができました。

それから、平成7年に、これも一つの大きなイベントで、川口市産業技術・技能者顕彰制度というのができまして、これはさっき申し上げた労政審議会でも2年にわたって審議した結果、こういうものができたわけでございますけれども、これは今でも残っておりまして、これは私ども本当によかったというふうに思っております。俗に川口で真っ黒になって働いている人がなかなかいい技術、技能を持っていたとしても、日の当たる場所がないわけですね。ですから、そういう人に日の当たる場所を与えるべきだと、そしてやっぱり川口の多くの人にもものづくりが大事だということをやっぱり知ってもらおうということから、これができました。それと同じように、その翌年には川口市技能振興推進モデル事業所の認定制度もできたわけです。これが永瀬市政のときの大きな出来事だったというふうに思います。

それから、続いて、岡村市政のときには、「産業の振興なくしてまちの前進なし」というやはりキャッチフレーズで、各種の資金融資がありました。緊急不況対策あるいは中小企業経営支援特別融資というようなこととか、いろんなことがありました。そして、さらには川口市商品券の発行、これは市長がよく言っておりました、「お買い物は私の街で川口で」というキャッチフレーズの中で、その一つとしてこの商品券の発行もありました。

それから、一番大きな、やっぱり私ども感謝申し上げてるのは、工業等制限法の廃止です。これは新しく製造業をつくったり、あるいは製造業の工場を拡張したりするときに、これがものすごく、壁になっていたんですけれども、その垣根がとれたということで、大変助かっております。

それから、さっきちょっと申し上げた埼玉新産業拠点SKIPがオープンしたのは平成16年。当時は中小企業都市サミットを川口市で開催したり、あるいは産学協働連携事業がスタートしたり、国際Dシネマフェスティバルが開催されたりというようなことで、いろんなことがありました。それで、市民ホール、キューポ・ラがオープンさ

れたのは平成18年、それから融資制度の中でも第三者連帯保証人ということがあったんですけど、これが非常になかなか難しいんですね。これも昨年廃止されました。これが岡村市政のときの我々産業界にとっての大きな出来事だったのかなと、こんなふうに思っております。

それから、次に産業界と行政、議会、市民と、ということで、いろいろなことが出ております。市の行政運営、行政改革のあり方をどう見ていたのかというようなことがありますし、議員のあり方をどう見ていたのかなんて、大変何かおこがましいようなものが出ておりますので、それは個別にコメントすることを避けて、まず産業界で一番大事なことは、3要素と言いまして、金と人とのなんですね。金については、やっぱり融資制度ですね。人というと、やっぱり求人とか雇用ということで、これはさっきちょっと申し上げた川口市雇用対策委員会とか雇用対策協議会ということで、かなりいろんな面で私どもありがたかったというふうに思っております。それと、もう一つは、せっかく求人したものの、教育・訓練あるいは宿舎の問題があるわけですね。これもさっき申し上げた大野さんのときのいわゆる産業文化会館ですね、当時の、それから訓練校というようなことで、かなりいろんな面で恩恵を受けております。

それから、ものについてはやっぱり2つあると思うんですね。ものでも材料というものと、やっぱり仕事量というものがあると思うんですね。材料については、さっき申し上げた川口産業振興公社ですね。銑鉄を輸入してもらったり、かなり助かっていると思うんです。問題は仕事量なんですね。例えば不景気になると、市はありがたいことにいろんな融資制度をしてもらいますが、業界の立場で言うと、お金は何とかなるよと、一番欲しいのは仕事なんだよということをよく言うんですが、ただ、これ我々は役所に仕事を何とかしてくれと言っても、これは無理なんですね。そこで、できたのが例の産業振興公社だったというふうに思うんですよ。ところが、この産業振興公社がなかなかこの仕事量をふやすということになかなか関連が薄かったんですね。ですから、我々としてはその辺がちょっと歯がゆかったのかなというふうに考えております。

それで、当時、私ども、私が理事長のときに、川口はせっかくものづくりが集まっているんだから何とかしなくちゃいけないということで、川口の工業をもっと振興させようっていうんで、川口工業振興協議会というのをつくりました。これは鋳物組合、それから木型組合、銅合金、アルミ、それから我々ものづくりに関係ある川口機械工具商業協同組合、それに私ども機械組合と、この6つの組合が集まりましてね、川口工業振興協議会というのをつくって、それで何とか川口のものを全国にPRをして、川口に来れば何でもできますよということをPRして、仕事量を確保しようじゃないかという動きを始めました。これも今でも続いております。そんなことが私どもでやった事業だと、こんなふうに思っております。

話はまだまだあるんですけど、大分もう予定よりも10分以上過ぎてしまっておりま

して、申しわけないんですが、それで、できれば、私どもの願いとして、行政あるいは議会にお願いしたいことをちょっと申し上げたいと思いますが、まず川口の立地条件、今、非常にいいわけですね。高速道路は通っているし、地下鉄は通っている、あるいは利便性がすごくいいわけですから、これを生かしてやっぱり企業誘致をできればしていただければ、例えば大企業が来れば、それに基づいて、それに伴って、いろんな仕事量が川口に落ちる。これは非常に勝手な言い方なんですけどね、我田引水的な言い方で、申しわけない言い方なんですけど、これができればなというふうに思っております。

それから、さっきちょっと大野さんのときに申し上げたような集団工場あるいは工場アパート、もちろん新郷工業団地、それから南平工業団地あるいは特に工場アパートといえ、緑町の工場団地がありますけれども、それにプラスやはり何かこの集団工場、工場アパートの土地ができればいいかなと。そしてさらに、できれば工場をつくってもらって、これはどこでもいいんですよ、第三セクターでもいいですから、つくってもらって、リースでそういった工場を使えないかなという検討をしていただければありがたいなと、こんなふうに思っております。

それから、さっき申し上げた、川口は特にやっぱり住工混在がありますので、やっぱり工場の新築とか改築とか、もちろん工業等制限法がなくなりましたけれども、それにプラスやっぱりそういった面の資金融資制度、こういったものも考えていただければありがたいなというふうに思っております。この辺はもちろん我々の願いでございますから、自分勝手な言い方になると思いますけれども、その辺は御勘弁いただいて、そんなようなことを考えております。

さらに、市にお願いしたいのは、定期的に、少なくとも経済部とのいわゆる意見交換会の場、できれば工業振興協議会あるいは商工会議所を含めたやっぱりこういった意見交換の場をつくってもらえばありがたいなと。1年に1回でもいいですし、定期的っていうことですから、2年に1回でもいいですから。

それから、市議員さんをお願いでございますけれども、やっぱり議員さんとの意見交換会、これは、いろんな言ったことに対する責任を負うとか、そういうことではなくて、ざくばらんな意見交換ということで、例えば民主党だと、民主党の皆さんはやっぱり民主党っていう看板をしょってる、共産党の皆さんは共産党っていう看板をしょってる、自民党の皆さんは自民党っていう看板をしょってるということじゃなくて、そういうことは離れて、言ったことについては責任を持たなくても結構でございますから、とにかく意見交換をという場をつくっていただければありがたいなと。これがやっぱり川口の工業のこれから大きな振興の一つになるんじゃないかなと、こんなふうなお願いがございます。

もう大分時間が過ぎてしまったので、いかがでございましょうか、この辺でとりあえずやめさせていただきます、後また何かありましたらということで。

○金井部会長

どうもありがとうございました。それでは、皆さんのほうから自由に質疑をいただければと思いますので、どなたからでも、どうぞ。いかがでしょうか。

では、私から一つ、鋳物屋さんが工場を持って土地を持っていた場合に、それが、川口ではその後、マンション化していったということがあったわけですが、そのときに不動産業とかマンションオーナーに転換していったというプロセスは、業態変化としてはあったんですか。

○小嶋氏

これ一つは、やっぱり、さっき申し上げた、いわゆる地域指定っていうんですかね、名前は間違っているかもしれませんが、駅の周辺が商業地域、その近辺がまた住宅、その外が準工、それから工業専用ということになりましたので、特に駅の近くにあった鋳物工場さんはそこでもう鋳物ができないということになってしまったわけです。もちろん代替地については市があっせんしたり、あるいは、さっき申し上げたような団地に誘致をするということもあったんですけれども、やっぱり鋳物屋さんの中には自分のところを離れたくないという人もありました。それが一つ。

もう一つは、やっぱり公害問題が結構ずっと長く続いておりました。昭和40年代から始まった公害問題が続いておまして、いくら先に工場をつくってあったといたって、やっぱり公害問題については権利がないので、権利って言っちゃおかしいですね、やっぱり義務があるわけですから、そのために、じゃこの際思い切ってやめちゃおうということがありました。

それから、不景気が何回も繰り返しているうちに、やっぱり不景気が何回も続くんじゃ、もうおれはやめるよという企業もありました。

それから、もう一つは、自分はいいいんだけども後継者がいないと、自分の企業の後継者がいないということとか、あるいは、当時はまだまだ3K企業と言われてましてね、鋳物工業、特に機械屋もそうなんですが、「きつい」、「汚い」、「危険」ということで、若い人が鋳物屋さんに来なかったんですね。そういう人材不足、これは社員としての人材不足、それから跡を継ぐ後継者としての人材不足、両方ありました。そういうことで、やっぱりここで思い切って鋳物屋さんをやめちゃおうじゃないかということがふえたわけですね。

それで、じゃどうするかというと、せっかく広い土地があるから、その土地を簡単に駐車場にしちゃおうと、駐車料で何とかやっていこうと。ところが、そのうちに駐車場だけじゃだめなので、この土地を半分なら半分売っちゃおうと、そこにマンションをつくっちゃおうと、あるいはスーパーマーケットをつくるとか、そういうような動きが出てきたのかなと、こんなふうに思います。

○落合委員

一つ質問してよろしいでしょうか。現在の商工会議所のメンバー数、会員数と、その中で機械関係とか鋳物関係とかの業種別実態を教えてください。

○小嶋氏

申しわけありません、今日はちょっと詳しい資料を持ってないんですが、今、現在は約8,000社です。社というか、個人事業者もありますから、8,000件と言いますかね、8,000会員ですね。一番多いときは1万1,000ぐらいありました。それが4年ぐらい続きましたかね、1万以上が。それが今はだんだんじり貧になってきてまして、またちょっと今上がってきたんです。1万に戻そうということをやってます。今、8,000会員です。

それから、鋳物、機械関係は、これは業種別部会で見ればいいんですけども、両方あわせても3割はないでしょうね。3割ないと思います。

○落合委員

2,300から2,400ぐらいですか。

○小嶋氏

そうですね。そんなにないですね。ないですね。今、鋳物組合さんが約100数十社ぐらい。もちろん組合員以外がいますから、組合員以外が恐らく倍ぐらいいると思うんですけどね。だから、300社ぐらいだと思います、全部で。機械関係が今210社ですけども、これが約3倍ぐらいいると思います。600社ぐらいあると思いますよ、川口でものづくりをやっているのは。それから、それ以外にやっぱりものづくりが結構ありますけどね。いや、3割はいないですね。1割5分ぐらい、15%あるかないかでしょう。15%で1,200社ぐらいですか。そうですね。1,200社ぐらいだと思いますね、会員としては。

○落合委員

新しい会員の業種について、何か傾向としては増えているとか、例えばサービス業だとか、ありますか。

○小嶋氏

まずサービス業ですね。その中でものづくりに関係あるサービス業が結構あります。コンピューター絡みの関係とか、そういうのが結構ありますね。サービス業が圧倒的に多いですね。それから、いわゆる流通業と言いますかね、流通業関係。

○落合委員

建設業関係は増えているんでしょうか。

○小嶋氏

建設はあんまり増えてないですね。

○落合委員

ある程度の数はあるんですか。

○小嶋氏

ある程度の数があります。

○落合委員

わかりました。なぜそんなことを聞いたかと言いますと、川口の伝統産業、特に鋳物産業は本当に歴史的に市政の中で重要なポイントを担ってきていただいていると思いますし、御苦労もあったと思うんですが、これは続いてほしいと思います。また一方、新しい今の産業構造が変化していると思いますので、鋳物、機械工業以外のことも考えた商工会議所の動き、それがまた市民の市政についても必要なんじゃないかなと思ひまして、伺ったんですが、その辺のところはどうお考えでしょうか。

○小嶋氏

まさにね、おっしゃるとおりなんです。いわゆる鋳物とか機械にこだわっていたんでは、これから数はそんなに増えませんが、恐らく衰退する一方だと思いますよ。だから、これは永瀬さんのときですか、いわゆる新産業創出ということをね、さっき私が申し上げた関東経産局がやっている新産業創出推進ネットワーク、これはまさにそうなんです。これがたまたま私が今、川口の会長みたいな立場でやっているんですけども、これがまさにそうでね、今までの例えば鋳物、機械だけでは、これから特に川口のまちの産業っていうのはもう先が見えていって、だから、そういうことではなくて、新しい産業をどんどん創出していかなければ、これからの川口のまちはないですよということなんです。

それで、特に今までやっていた事業所が特に変換をした方がいいという、これは国の政策なんですね。例えば我々機械屋ですけども、機械屋はもちろん続けるんですけども、それ以外に違う仕事を見つけて、その仕事の分野もやりなさいよと、そうすることによって、機械屋としていわゆる生き残る道があるんじゃないでしょうかということ。それから、ものをつくっているところについては、自分たちの商品を新しく何か新商品をね、新しい商品を開発してくださいと、こういうことなんです。

れがいわゆる新産業創出推進ネットワークという事業の大きな一つの目的なんですね。

これがちょっと今の話と関連していて、三つあるんですけどね、一つは新産業創出支援事業っていうのがあるんですね。これはまさしく新しい産業を生み出そうっていうんで、その中でビジネスファクトリー事業というのをやっているんですよ。これはどういうのかっていうと、何かこういう仕事を私はやりたいんだという人を申し込んでもらって、いわゆるコーディネーターの会っていうのがあって、そこで発表してもらうんです。そこで、その仕事についてはこういう人をつけますから、それで頑張ってくださいよというビジネスファクトリー事業というのがあるんですね。これが新しい産業創出支援事業なんです。

もう一つは、連携促進事業っていうのがありまして、これはその企業に専門家を派遣して、その企業の簡単に言えば企業診断、それで、コーディネート活動をやってくれるわけです。例えば私の機械屋に来て、こういうところはこういうふうに変えた方がいいですよとか、そういうアドバイスをするという、こういう活動もやっております。

それと、インターンシップ推進ですね。ですから、高校生とか大学生のインターンシップを推進しながら、その企業に派遣をして、ということですね。

それから、今度は企業と大学との、いわゆる企業のニーズと大学のシーズをマッチングさせようとかですね。今、大学は、こういうものが欲しいんだけど、どこかつくるところはないかというシーズが結構あるわけです。ところが、企業の方は、こういう仕事が欲しいんだけどっていうニーズがあるわけですよ。それをうまくマッチングさせようと。

それから、もう一つは、特に大企業なんかを定年でおやめになって、優秀な人材がたくさんこの世の中にはいらっしゃるんですね。そういう企業OB人材マッチング協議会というのを作りましてね、その人材をやっぱりいろんなところに派遣しようという、こういう連携促進事業というのをやっています。

それで三つ目は、さっき申し上げた、売ることが弱いわけですから、川口のものづくりは。で、販路開拓支援事業というのをやっているんですね。そのうちの 하나가、販路開拓市場戦略セミナーというのをやっているんですよ。これは特に売ること上手な企業のどなたかをお呼びして、いわゆる講師例会をやるんです。講師例会をやりながら、そのいわゆるディスカッションをやるという、単にお話を聞くだけではなくて、こういうことをやっております。

それから、販路拡大のためのマッチング会、いわゆる商談会ですね、そういうこともやっております。これは多くの企業に呼びかけて来ていただいて、実は川口にはこういうものがあるんだけど、ぜひこういうものを買ってくれというようなことでね、そういうこともやっております。これが関東経産局がやっている東葛・川口地域新産業創出推進ネットワーク事業ということで、今までの鋳物とか機械とか木型とかとい

うことだけをやっていたんじゃない、川口のまちは自然に衰退しますよということで、新しい産業をつくる、それからまた新しい商品を開発すると。

しかも、川口のまちの中には、よそから移ってこられて結構成功している企業があるんですよ、ものづくりで、あるんです。例えばハンドバッグをつくっている会社だとかね、「よく出ますね」と呼ぶ者あり）出ますでしょう。そういうところとかね、ほかにもあるんです。例えば飛行機の荷物入れるところをば一つとあけますね、中はなかなか見えないじゃないですか。上にはミラーがついていると思うんですよ。これはコミーさんっているところでやっているんですけどね。これも平面なんですよ。板ガラスで凸面のいわゆる鏡ができるんですよ。そういう開発をした企業なんです。そんなような企業とかね、挙げたら結構たくさんあるんですよ。そういう、だから川口じゃなくて、よそから来た方で、川口でそういう新しい企業を、ものづくりを始めたという企業が結構ありますので、そういうところと連携をとりながら、やっぱり新しい事業をやっていこうと、こういうことが今、会議所でやっております。

○落合委員

わかりました。ありがとうございました。

あともう一つだけ、よろしいでしょうか。さきほど鋳物・機械業界と川口市政との関係は余り触れられなかったんですが、我々も勉強してきたところによれば、これまでの川口市長10人のうち、鋳物関係の市長も7人ということですから、実質的にはそういうことでもう既に影響をお持ちです。今のお話でもいっぱい出てきたように、市とうまく協調されて、支援制度とか、資金の援助とか実現してきました。その辺はやっぱ商工会議所あるいは機械組合、商工組合の重要なミッションということで日頃、ご尽力されたということでしょうか。

○小嶋氏

これね、建前論からいきますと、会議所が政治活動はやらないんです、建前からいきますとね。ですから、会議所としては、例えば市長選挙があっても、何々市長さんを応援する組織をつくろうということはないんです。ただ、この世の中うまくできておましてね、建前と本音じゃないんですが、日本商工連盟っていうのがあるわけです。これは政治的な組織なんですよ、商工連盟。ただし、これは大きな組織ですから、例えば川口市の市長選挙とか県議員さんの選挙とか市議員さんの選挙にどうということじゃなくて、これは大きな国政の選挙のときには日本商工連盟というものがいわゆる政治活動というか、選挙活動をやるんです。

ですから、川口の商工会議所は、そういう意味では市長さんの選挙にしろ、県議員さんの選挙にしろ、市議員さんの選挙にしろ、いわゆる組織としては全くやってないんです。ただ、各業種組合がありますから、これはやっぱり業種組合として、し

かも、これも業種組合では、例えば我々川口機械工業協同組合としてはできませんから、川口機械工業政経研究会という組織をつくるわけです。鋳物工業政経研究会というのをつくるわけです。そこで選挙活動あるいは政治活動をやると、こういう仕組みになっています。

当然、やっぱり我々業界、機械屋ですから、池田議員さんが出てますから、そういった議員さんはやっぱり応援すると。それから、県会議員さんではやっぱり奥ノ木さんが出ているから、奥ノ木さんを応援するということはやります。それから、市長さんの選挙についてもね、さっき申し上げたように、歴代の市長さんが、やっぱりこれは議員さんのいろんなお力があるんですが、いろんな面で産業に対して温かい、いわゆる保護政策という言い方がおかしいんですけど、やってもらってますので、これはやっぱり市長さんの応援もいわゆる政治連盟としてやります。そういうことだろうと思いますよね。

ただ、残念ながら、残念ながら言っちゃ申しわけないんですけど、前は半分が、市会議員さんの半分が鋳物、機械の出身者があったんですね。今はもう本当に数えるほどしかいないんですよ。そういう意味では、なかなか我々のお願いというか、意向をね、議会の金子議員さんを初め大勢の方がいらっしゃる中で反映することは難しいんですけども、でも、例えば池田議員さんなら池田議員さん、あるいは何とか議員さんっていう方がまた頑張ってくれてますので、そういう意味では本当にありがたいと思ってますよね。そういうことだろうと思います。

○池田委員

まず、先ほど産業界と議会の議員との、党は別にして、交流会という話がありました。実際、私ども平成16年から自民党が初めて機械組合との懇親会をやって、その後、各団体と毎月のように、異業種交流会じゃないですが、そういうことをやっているんですが、この川口の産業界中心の中から、私のあくまで個人的な見解ですが、なかなか共産党さんとか民主クラブさんなんかも産業界との交流会を今まで試みたっていうか、そういう呼びかけみたいなのはなかったように思うんですが、その辺は逆にそういう、小嶋さんも機械組合の理事長や商工会議所の副会頭をやられていて、そういうものっていうのは産業界で持っているんですかね。これがまず第1点です。

二つには、企業誘致、私ども機械組合で毎回やっているんですが、まず場所がない。県とか通じて、いわゆる調整区域があるじゃないかと。というのが、以前プルトンチェンの問題で、私どもは企業誘致したいと。ところが、実は、移転するところと買うところが値段が同じだと。そうすると、新しい設備をすると、借金の上乗せをして出ていかなくちゃならない。それではとても企業としては存続しないということで、たしか理事長のときに働きかけたんだけど、そんな高いものは買えないということで、やめてしまった経緯があるので、そういう調整区域とか例えば行政が買っていただい

て、それを50年とか、リースじゃないですけど、そういう形も研究してくれと。それは市だけではできないので、国・県とのリンク等を今非常に真剣に考えておるんですが、この2点について。

保守系の議員はよくやるんだけど、産業界と。どっちかというと、反自民といたら、ざっくばらんに、なかなかそういうことを議員の中でも余り考えていないのかなという感じがするんですが。利害関係は除いて、どういうふうに考えてるんだということがやはり私はあっていいかなというふうに思ってますけど。

○小嶋氏

私はね、私個人としては、やっぱりいわゆる党派は別にね、関係なくやっぱり市会議員の先生方とざっくばらんに私はいわゆる懇談を続けた方がいいと思うんですよ。お互いに、その話を一つの、何と言いましょかね、根拠にしてね、こういうことを言ったじゃないかとか、ということじゃなくて、ざっくばらんに話し合いをできれば、私は例えば党派は関係なく話し合いはした方がいいということを理事長のときには申し上げたんです。ところが、いろんな反対があって、正直言って、できなかったんですよ。私はざっくばらんに議員さんとの話し合いはすべきだと思いますよ、それは。

ところが、これね、我々の側もいけないんですけど、議員さんの側も、大変申しわけないんですが、それを一つの旗印に言われる方がいる可能性があったんですよ。何だ、こんなことを言ったんじゃないかというね、言質をとられるという危険性があったもんですから、非常に難しかったですよね。そうじゃなくてね、お互いざっくばらんに言いたいことは言い合って、本当にだから意見交換はできればいいというのは、私ども、理事長のときも何回も考えたんですけどね、結果的にはできなかったんですよ。

○池田委員

理事長が発言したとき、私ども保守系はどちらかという、いわゆる産業界寄りの考えの発言をしますよね。でも、やはりほかの面から見られるという意味では、やはり他党の先生方とそういう意見交換をすると、やはり切り口が違う考え方、そういうことがあるので、私は、今日、小嶋さんが、今おっしゃったこれが実現できればいいかなというふうに思っているんですけども。

○小嶋氏

私も個人的にはね、絶対にこれをやった方がいいと思うんですよ、個人的には、党派を超えてね、超えてやった方がいいと思いますよ。

○池田委員

金子先生、よく聞いといて。

○金子委員

いや、もう重々よくわかっているんで。

○小嶋氏

ざっくばらんな言い方しますとね、共産党の中にもものわかりのいい先生もいらっしゃるんですけど、自民党の中にもものわかりの余りよくない先生もいらっしゃるの
で、これ非常に難しいんです、これはざっくばらんな話で。難しいんですよ。個人的
にはわかってくれるんですけど、やっぱり……

○池田委員

私なんか手始めに、金子先生なんかを私どもの工場に連れてきて、変な話、女性の
議員さんは「私ども、取鍋つくっているんですよ」って言ったら、「鳥かごをつくって
いるんですか」と言うから、そうじゃなくて、いわゆる鋳物屋さんで使う取鍋をつく
っているんですって、実際に見ていただいて、やっぱりそこからいろんな話ができて
きます。今、比較的、金子さんの党は、我々よりもそういう産業界に出ていって、組
合の何社かを足を運んでいただいて見ていただいている。ものづくりをよく見て、逆
に真っ白な気持ちで見てくれるから、意外といろんな視点からいろんな意見を言っ
てくれますので、これはもうぜひ、私だけではできませんけど、いい話なので、ぜひこ
れを実現していきたいかなと思います。

○小嶋氏

そうですね、はい。

○金子委員

大変いい話なんですがね、これ政治になると、なかなか難しいんだよね。ざっくば
らんに言うとなね、20年ぐらい前に機械組合さんの話でね、うちの、もう今はいないけ
ど、議員が取り上げて、それが政治的にとられて、私らの懇意の先輩の、沼口達男議
員から怒られちゃってね、内部ではね。そういうようなことがあったりして、商工会
議所には訪問したりね、いろんなことで個々には訪問して、いろいろやってますけど。
今、政党所属、かみしもを脱いで話し合おうということについては、私はいつも一貫
してそういう考えなんです。

ただ、地方政治の現行法の法律からいったら、二元代表制だから、本来統括的なこ
とについては公平にやってやるべきだというふうに思っているんだけど、なかなか川

口、私らもそう思い込んでいた節もあるかもしれないけど、そんなことについて、今、話を聞きながらね、やっぱりそうは言いながらも、色眼鏡で私らも知らず知らずに、選挙になるとね、嫌な思いもいろんなことが起きるから、起きるけど、そういうことについてはね、今の言葉を聞きながら、さりとて、そういうふうにならざるんではないかと思ったときに、今の言葉はありがたく受けとめつつ、そういうことを取り上げるとか、そういうんじゃないくて、この現状をリアルに認識するためにはね、二代表のこともあるというふうにならざるんではないかと考えています。

○小嶋氏

それから、池田議員さん、もう1点ですね。

○池田委員

誘致、企業誘致。これ私どもは、組合から、近い将来やはりいわゆる市街地でやっている企業がどうしてもその場所でやれなくなると、そのためにはいわゆる誘致をしたり、工業団地をつくって、そういう場所をつくれば、埼玉県がやっているように川口に呼べるのに、もう空き地がないと。空き地がないなら調整区域を何とかしろと言ってるんですが、その点についてはどうですか。

○小嶋氏

一番いいですね、本当はね。それこそ先生の皆さんがその辺は……。いや、本当ですよ。一番いいんですよ、それが本当は。

○池田委員

超党派でね、超党派でやる問題だというふうに思うんですね。

○小嶋氏

なかなか難しいんですよ、なかなかね。

○池田委員

市中があいてるんですけどね。あいている土地で使えない土地だと、調整区域でしょう。もう全部国の縛りがかかって、できないんですね。

あともう1点聞きたいんですが、なかなかこれだけ集積しているにもかかわらず、今、ハンドバッグつくってくれたりしていますが、なかなか優秀な企業が入ってきてくれない。例えばSKIPができたにもかかわらず、その後、余り企業が私どもの市に入ってきてくれないというのは、小嶋さんから見て、どこが欠けているんですか、我が川口は。

○小嶋氏

難しいですね。

○池田委員

何かやっぱり川口はこれだけ利便性があるのに来ないっていうのは、で、流通なんかはたくさん来ているんですよね。

○小嶋氏

流通条件は非常にいいですもん、川口市は、最高ですよ、流通条件は。

○池田委員

何で製造業が来ないのかなと。

○落合委員

その企業誘致については、税制の優遇なんていう方策はあるんですか。例えば考え方として、よく県レベルとかでは、そういう話を聞きますけど、市レベルで何かメリットを示すことは可能なのでしょうか。

○小嶋氏

ものづくりに関してですか。

○落合委員

ものづくり企業の誘致をするときにね。

○池田委員

支援的ないろんなものっていうのは、全国一だと思うんですよね。

○小嶋氏

全国一ですね。

○池田委員

これはもうあんまり丁寧過ぎちゃって、自立ができないぐらい。ほかの例えば中小企業都市サミットなんかをやっている他の都市なんか見ると、やはり東大阪のようなああいう私どもと同じにやっぱり集積しているところから見たら、自助努力をしろという感じですが、私どもは、川口市が一所懸命やってやるから頑張んなさいっていう、そういう感じの手厚いやっぱり支援はしてますよね。

○小嶋氏

もう過保護ぐらいの感じですよ。

○池田委員

過保護ですよ、本当。経済部なんか、お買い物の商品券つくったって、残っちゃったなんて話を聞くと、えっと思いますよね。あんな1割もつけてね、5,000万の予算を手当てしたのに、売れ残ったとかというよね。

○林委員

本日は、本当にいろんな話をありがとうございます。私は日ごろ、川や自然保護の関係でボランティアを行っていきまして、すごくいい勉強になりました。

それで、2点なんですけれど、お聞きしたいと存じます。一つは、お話の中に産業、つまり川口の植木や鋳物などを観光化するというお話がありましたけど、もう少し詳しくこれについてお聞きしたいという点です。

2点目は、最後の方のお話で、産業界、行政や議会との関係については言及があったかと思いますが、産業界と市民の関係について伺いたいと思います。市民と言っても非常に多様です。川口都民であったり、従来からいらっしゃる市民に対して新住民の存在があったりと。私も新住民の一人なんですけれど、産業界と市民の関係についてお尋ねします。

そうした2点についてもう少しお話を聞けたらと思いますが、よろしく願いいたします。

○小嶋氏

最初は、産業を観光化することですね。一番のものは、川口はものづくりをすることは上手なんです。ところが、それを売ることが弱いんですね。鋳物屋さんにしたって、いいものをつくるんですが、その売り方が非常に不得意なわけです。それから、機械屋もそうなんです。ということは、一番ものが、機械屋も鋳物屋さんも、ある人から頼まれてものをつくって、売る義務がなかったわけです、最初、鋳物屋さんも。こういうものをつくってくれよと言われて、つくればよかったんです。機械屋もそうなんです。ところが、今やまさに時代は変わって、自分のところで考えて鋳物をふく、あるいは自分のところで考えて機械加工をしたものを売るわけですから。ところが、その売ることが苦手なわけなんです、川口の鋳物屋さんとか我々機械屋っていうのは、非常に苦手なんです。まず、それがあるわけですね。

そんなことで、とりあえずは、だから鋳物さんと植木屋さんを、観光化しようということなんです。

○林委員

具体的にはどのような。

○小嶋氏

具体的に言いますとね、川口にはこういういい鋳物の製品がありますよということをして、各地区へ売りに出そうということなんですね。それから、植木も、もちろん知っている人は知っているんですけども、川口にはいい植木がありますよということをもっと観光化してお客さんと呼んで、見てもらって、そして、それを商売につなげようと、こういうことなんですよ。

特に、鋳物の場合には、いわゆる日用品鋳物っていうのがあるわけですね。簡単に言えば、鍋、釜とか、そういう食器類とかあるわけですね。それから、うちの中に飾るような灯籠だとか、いろんなものもあるわけですね。非常に鋳物の種類っていうのは多いわけですよ。そういうものが一般にはわかってないわけですね。ああ、これも本当鋳物なんですかっていうぐらいですから。そういうものをどんどん売り出して、鋳物製品っていうのはこういうものがありますよと、だから、どうぞ買いに来てくださいよということをして売り出そうと。それにはやっぱり単に例えば何々鋳物会社で売ったんじゃないので、観光化して世間一般に、例えばパンフレットを配ったり、あるいはPR活動をしたり、あるいはお客さんを呼ぼうじゃないかと、そういうことなんですね。

だから、植木なんかも結構川口で植木をつくっているというのは意外と知られてないわけですよ、全国的には。だから、それを商工会議所としては取り上げて、いわゆる会議所の組織としてね、例えば全国に川口にはこういう植木がたくさんありますから、どうぞお使いくださいっていうことをPRするとか、あるいは、鋳物のまち、川口ではこういう鋳物製品ができますよと。これは一つは公共鋳物っていうのがあるわけですよ、公共鋳物。それから、一つはやっぱり日用品の鋳物があるわけですよ、鋳物としてもね。そういうものをどんどんPRしていこうと。これを、だからまさに、言葉はちょっと合わないかもしれませんが、観光化しよう。それで、ぜひ川口に来てもらって、川口にはこういう鋳物がたくさんありますよということを見てもらうじゃないかということなんですよ、その鋳物と植木の産業観光化っていうことは。

○林委員

それと産業界と市民とのかかわりの方では。

○小嶋氏

これはね、なかなか難しいんですよ、非常に。だから、例えばたたら祭りだとか、あるいは川口特産品展示会とかってありますよね。そういうところをうまく使って、

多くの市民の皆様、川口には例えばこういう鋳物がありますよとか、あるいはこういう植木がありますよとか、あるいはこういう川口には金属製品がありますよとか、そういうものをやっぱり展示するっていうか、PRするとか、そういうことが必要だろうと思うんですよ。だから、特産品展示会とか、あるいはたたら祭りにはいろんなそういう製品を出すとか、そういうことの積み重ねしかないと思うんですよ、市民の方に知ってもらうことは、だと思えますけどね。

○落合委員

先ほどの話の中で、永瀬市長の時代に商工会議所として川口市まちづくりの提言されたというお話があって、具体的なお話もしていただいたんですが、それに関しまして、これはあくまでも商工会議所の方の発意で、商工会議所として川口市はこうあるべしという話をご検討されたということでよろしいんですか。

○小嶋氏

そうですね。20年前にね。

○落合委員

それで、今の話の川口市まちづくりの提言について、例えば20年前ですけれども、新住民だとか、新たに加わった地域だとか、見方を変えて言えば、鋳物とか伝統産業以外のことにかかわっている市民とか、そういうものに対して意図した提言が何かあったんでしょうか。

○小嶋氏

当時、提言した中で、やっぱりともかく新しい市民、新市民っていう言葉がいいか悪いかは別にしてですね、新市民の皆さんに川口のまちではこういうものができますよということをもうちょっとPRしようということがまず基本なんですね。川口のまちにはこういうよさがありますよということをPRしようということが基本なんです。それにはやっぱりともかく今までの鋳物産業あるいは機械産業だけではだめなので、そういったものの中で、やっぱり官と民と学と、それから産業界との研究機関をつくって、それで第三セクターみたいなものをつくって、そういうことをもうちょっとPRしようじゃないかと。

でも、これ一つはね、例の川口の産業振興公社が本当はその仕事をやる場所なんですよ、本当はね。それから、もう一つ、やっぱり外部スタッフを活用しようと。ともかく川口の鋳物屋さんとか、我々機械屋とか、それだけじゃなかなか新しいことを考えられないので、外部スタッフを活用して、例えば大学の先生とか、そういう方々にも来ていただく、あるいは研究機関の研究をやっている研究者の方に来てもらって、

そういうものも含めて、やっぱり、新しいことを考えようじゃないかと、そういうことを提言したわけです。

○林委員

市民とのかかわりで、たたら祭りや展示会などで市民への浸透を図っていくというお話をなさっていました。その他に商工会議所のメルマガがありますが、実は私、個人的にそれを定期的に送っていただいているんですよ。それをいつも楽しみながら拝見しています。そういうIT関連のツールで商工会議所や産業界の方から市民にPRされていくことはいいことです。それで、あのメルマガは結構おもしろいですね、いろいろな情報が満載で興味深いです。

○小嶋氏

そうです。きょうメルマガの話はしませんでした。時間がなくて、しなかったんですけど、そうです、結構あれは反響があるんですよ。

○林委員

そうですね。今お話が出なかったのも、私の方から、失礼ながら申し上げたんですけども。

○小嶋氏

そうなんです。あれはものすごく反響があるんです。会議所もね、結構いろんなことをやってるんですよ。やってるんですけどね、なかなかその反応がね、林さんみたく反応があればいいんですけどね。いや、本当にそうなんですよ。

会議所もちょうど議員が変わったばかりですから、その辺はまたもう少し突っ込んで、せっかくのお話ですから、もっと効果が上がるようにやらせるように私の方からも言うておきましょう、それは。そうなんですよ。ここでちょうど議員が変わりましたからね、12月からね、新しい議員になりましたので。

○砂沢委員

今日はありがとうございました。ちょっと大きく三つほどお伺いしたいんですけども。まず1点は、ものづくりのまちを今後も訴え続けていくために、先輩が考えるに、一番必要なものは何だろうかということをも1点お聞きしたいことがまず一つ。

2点目は、それに関連してなんですけれども、多分きつとどの会社さんも潜在的に抱えているのは、まず後継者の問題であったり、あとは若い職人さん、若い社員の方の定着率はどうなのかということや、先ほどインターンシップなんていうこともありましたが、実際にインターンシップで具体的な成果というか、川口の会社に就職し

たりとかっていうことがあるのか、その人についてが2点目。

3点目が、今ちょっとお話しされてたこともそうなんですけど、例えば各会社さんとかで実際、今ですと、例えば僕らのJ Cの先輩でも、ある産廃会社さんなんかはそのネットからの仕事の注文ですごい伸びたりしてるんですけども。そういった意味で、実際、各会社の取引の中で結構インターネットを介しての全然関係ない地域からの例えば問い合わせだとか、それが実際仕事につながったとかっていうのは、そんなにまだ、されていないのかどうなのかっていう、その3点をちょっと教えていただければと思いますけど。

○小嶋氏

まず、一番最後のネットによるもの、これ正直言って件数はあんまりふえてないんですよ。せっかく皆さんがいろいろネットをやっている割には、意外と増えてないみたいですね。

○砂沢委員

それをお聞きしたのは、実はうちのJ Cのメンバーで、最近ネットで起業したメンバーとかもいるんですが、その彼とかは既にある会社さんのものをやっぱり売るために何かいろんなことをやったりしてて、結構伸ばしたりしているみたいなんですけど。そういった意味では、各会社さんでやるのか、実際、振興公社さんとかでやるのは多分きつと、具体的に何か動くというのは多分難しいんだろうなと思うんですけども、きっと多分ネットを使えば、これだけ集積しているまちなので、かなり波及効果はあるんじゃないのかなと思ったので、それがちょっと。

○小嶋氏

今の振興公社さんっていうのはね、正直言って一番手っ取り早いんですけど、何となく個人の利益につながるっていう心配があるんですよ。だから、非常にこの辺がちょっとね、振興公社の存在というのは難しいんですよ。本来はやっぱりまちのためにいろんなことをやるべきは当たり前なだけで、それがたまたま1社とか2社に偏ってしまうと、また、へ理屈を言う人はそれについて言うわけですよ、おかしいじゃないかと。でも、それをやっていると、なかなか振興公社さんの実績っていうか、よさが出てこないんですよ。

○林委員

1社、2社ヒットすれば、その後に続いてくると思うんですが。

○小嶋氏

そうなんです。我々はそういうふうに言ってるんですよ。1個それが成功すればね、その後その後とくるはずなんです。ところが、それがやっぱりある人から見ると、おかしいじゃないかと、1社だけがそれをやっていく、ということになっちゃうから、それがちょっと微妙なんですよ。本当はその壁を乗り越えていけば、結構振興公社もね、いわゆる生きる道っていう言い方がおかしいんですけども、かなりたくさんあると思うんですよ。

○林委員

ネットを通した産業の観光化、先ほどおっしゃってた、一つのツールとして何かつながりそうなんですけど。

○小嶋氏

私もそう思いますよね。

○砂沢委員

何かできそうじゃないかなと思うんですけど。その辺はちょっと、今、先輩の人に関することで、人も実はJCでやろうとしている部分があるので、それを、先輩のお答えを聞いてから、ちょっとお話ししようかなと思うんですけど。

○小嶋氏

ごめんなさい、もう1回、1番目は何でしたっけ。すみません。

○砂沢委員

1番目は、ものづくりのまちをこの川口が今後も謳い続けていくために一番必要だと思うこと。2点目が人ですね、後継者が育っているかということと、あとは後継者じゃなくて、若手の職人さんとか社員さんが実際入ってきているのか、また入ってきてるとしたら、定着率がどうなのかなというところ。それに関連して、先ほどインターンシップという、東葛・川口新産業創造都市の施策の中でインターンシップとおっしゃってましたが、それが実際川口の中で行われたりしてるのかなというところですね。

○小嶋氏

まず、後継者の問題ですよ。

○池田委員

ものづくりの企業として生き残れるっていう。

○神尾委員

謳い続けるために何が必要か。

○砂沢委員

1 番は、ものづくりのまちであり続けるために、先輩が考える一番大切なことっていうのは何なのかなと。これはちょっと抽象的なことになってしまうでしょうけど。

○小嶋氏

2 番目が後継者の問題ですね。

○砂沢委員

2 番目は、実際その会社における人ですね。実際、鋳物屋さんとか、機械屋さんとか、実際その各会社において後継者がやっぱり困っているかどうかなのかなというところ。それに関連して、多分ベテランの職人さんとかは当然多くいらっしゃると思うんですけども、現時点で若手の職員とかっていうのはやっぱり入社してきたりするのか、また入社してきても定着率というのは実際どうなのかなと。

○小嶋氏

単純に言いますとね、若い人っていうのは、いつときに比べて結構入社してきてます、川口のものづくりに。定着率もよくなってます、前に比べると。だから、ものづくりっていうものが大事だということがわかって入社してくる人が増えたのかなという気がするんですけどね。前は、とりあえず就職してみて、すぐやめちゃうと。ところが、今はね、意外ともものづくりをやりたいっていう若い人が増えてますよ。だから、ひとところに比べれば、自分の意思を持って入ってくる人が特に川口の物づくりは増えているというふうに私は思います。

それから、ものづくりのまちであり続ける、これが一番難しい問題なんですよ、これが。だから、単純に言いましてね、さっきもどこかの話に出てきたと思うんですけども、特に若い人っていうのはものをつくることはすごく好きなんですよね。今は好きなんです、ものをつくること。ところが、やっぱりいろんなことに縛られてやるのがだめなんですよね、特に若い人ですよ、特に若い人はね。これが苦手なんですよ。だから、その辺が非常に難しいと思うんですね。ただ、ものをつくったり、あるいは何か自分で苦労してやるということについては、何かいいんでしょうけどね。その辺が非常に難しいと思いますよね。答えになってないかもしれないんだけど。

○砂沢委員

今年、ＪＣの委員会の中でニートの就業支援というのをやるんですけど、実際、福生の方とかで、今、行政からしてみたら、簡単に言うと、生活保護を出しているのが、税金を出して、養っているわけじゃないですか。その抱えている家からしてみたら、親御さんからしてみたら、一番心配なのは自分が死んじゃった後、自分の子供はどうするのかという。それが働きに行ってくれば、もちろんいいわけで。例えば工場とかでいうと、やっぱり若手でちゃんと働いてくれる人が、定着率とか、そういったこともあると思うんですけど、そういった子たちって、そこでやっているのはやっぱり親がちゃんと金払って、会社とかで職業訓練とかさせたりするんですけど。そうすると、預かる側の会社の方も人も見れるし、そこにコストは発生しないじゃないですか、見習い期間ということで、逆に研修料をもらうような形になって。そうすると、だれにとっても多分きつといいことになると思うので、そういったのをちょっとやってみたいなと思ってますけど。それをやるのは、緑町の工業団地のトミタでやるんですけども。

○小嶋氏

だから、今の若い人っていうのは二分化されるんですよ。我々から見て、えっと思うくらい苦勞をいとわない人がいるんですよ。ある反面ね、全くそれがだめな人がいるんですよ。理屈だけはちゃんとしっかりしてるんだけど、自分で苦勞することは絶対嫌がる人と、それから意外と苦勞を平気でやる若い人といるので、その辺がちょっと難しいと思うんですね。特にものづくりの場合にね。

これは、だから年代とか地域に全く関係なく、そういうはっきり分かれた二種類の人がいると思いますよ、今の若い人はね。だから、ものづくりが好きで、自分が苦勞するのはいくら苦勞してもいいっていう人と、理屈だけは言うんだけど、ちょっとしたことですぐ嫌になっちゃう人と、この辺が非常に難しいと思いますよね。

○神尾委員

私自身は鋳物工場跡地のマンションに住む新市民なんですけれども、今、川口市の中で一番自分が仲よくしている人は鋳物屋さんです。それも砂と木型を使って……

○小嶋氏

昔の完全な鋳物屋さんですね。

○神尾委員

はい。アルミ合金なんですけれども、彼は「おれが一番原始的な鋳物屋だからね」って胸張って言うんですよ。私と同じ年なんですけれども。「おれが一番原始的なんだ

よ」って胸張って言うんですよ。そういう人物がやっぱり今後も元気で働いていってほしいなと心から思っているんですけども、それ1点。

次、外国人の方々。やる気があって日本に来て、川口で仕事を学びながら何かしようって思っている外国人の方々がいっぱいいらっしゃると思うんですけど、この辺についてと。

次なんです、企業、大企業ですけども、工業誘致とともに、なぜか川口は大手の企業がどんどんなくなってしまう。ディーゼル、ピストン、東芝、サッポロビール、うちの近所のコカ・コーラ、どんどんなくなってしまう。その辺の問題をよろしく願いいたします。

○小嶋氏

何か最後の問題は、市長さんに答えてもらわにやいかんような問題で。(笑声) 最後のは難しい問題ですよ、これはね。大企業がいなくなっちゃうというのは何でなのでしょうかね。これちょっとわからないですね。

外国人の問題、2番目ですね、外国人の問題。これはどうなのでしょう、今あんまり問題にしないような……

○神尾委員

問題っていうか、悪い意味じゃなくてね、やはり市民の仲間としての存在。外国人の方を育てるという、そういうものがあるかどうかですね。

○小嶋氏

いわゆる我々の企業の中では、ひところね、これはいいとか悪いとかは別にしましてね、やっぱり労働者が足りないということで、結構、外国人の方をお願いして、力になってもらった時代がありましたね。その後、いろんな問題から、外国人は余り使っちゃいけないよというような一つのものができちゃったので、今、使っている人は本当に少ないと思うんですよ。でも、でもやっぱり外国人でも優秀な人も結構いますからね。

○神尾委員

そういった方をまちの力にするとか、そういうことはないんでしょうかね。

○小嶋氏

いや、私はいいと思いますよ。どこの人間だっていうふうに区別しないで、ちゃんと、日本のしきたりに合わせてくれる外国人であれば、私は別にいいと思いますね。日本のしきたりに合わせるということは、やっぱり郷に入れば郷に従えっていうよう

なことで、その会社なら会社の生き方にちゃんと合ってくれる人であればね、私は外国人であろうと、ちゃんとした、ビザを持っているんなら、私は関係ないと思いますよね、そういう意味ではね。

○神尾委員

それは国際化に発展するような……

○林委員

いい意味で外国人の人材が川口で生かされたらと思いますね。例えば、国際都市の川口として、ものづくりの伝統も発展途上国の若い人材への技術移転に生かし、発展していけたら。それらを含めたお話ですね。

○神尾委員

それとか国際交流とか、海外に販路を拡大していくとか、いろんな意味を含めて、この国際化の時代の中で、外国人労働者という方々はこの川口の中でどんな位置を占めているのかなと思いました。

○小嶋氏

特に鋳物関係については、例の海研会っていう組織が、海外研修制度という、海研会という組織がありまして、定期的に中国とかあの辺の方を呼んで、例えば2年なら2年、3年なら3年、きちっとこちらで研修をして、そして送り帰すという制度は、これはあるんですよね。その方々が地元に戻って、鋳物工場をやる人ももちろんいます。あるいは、違う職業につく人もいますけれども、そういうことはこれやってます、鋳物業界としてはね。しかも、これは正規のきちっとした国の認可をとってやってますので、だから問題はないと思いますね。

あと、これ言い方はちょっとおかしいんですけども、不法入国されている人を不法に使っているところもひところあったんです、ひところはね。今はほとんどないと思います、それは。だから、これがブラジルの方であったり、あるいはインドネシアの方であったりというね、いろんな多国籍の方がおりましたけれども、それは不法入国した人を不法に使っていたということはありました、確かにこれは。ところが、今はもう全くないですよ、それはね。

○神尾委員

見つかると、強制送還なんですか。

○小嶋氏

もちろんそうです。ただ、そういう目で我々は見えますけれども、中にはやっぱりきちっとした職業意識があって、あるいはものを覚えたいという意識があって、しっかり覚えて帰った人もいますよ。いるんですけども、中にはやっぱり悪いところに染まっちゃって、犯罪の方に走っちゃうとかっていうことが多かったので、今はもうだめになってますけどね。結構いましたよ、ひところはね。ただ、組織としてやっているのは鋳物の海研会っていうのでね、中国の方をきちっと何年間か研修して帰すという、これはやってますけど、今でもね。

○落合委員

先ほども、若い人の鋳物業界とか機械業界に入る方を確保することが必要だというお話がありましたけど、中国の方とか、今、特定な国の名前は出てませんが、海外に行くのはあくまで短期間なんですよ。

○小嶋氏

そうですね、短期間です。

○落合委員

そうですね。かつ、目的としては、技術を学んで帰りたいということもあるでしょうし、あるいは、技術などを教え込んで、こちらの会社が中国などの、現地に出している現邦会社の幹部になってほしいとか、という形でやっておられることもあると思うんですが。

○小嶋氏

そうですね、ひところは人手が足りなかったから、人手不足を解消するために（「一時的にでも」と呼ぶ者あり）最初はね。ところが、これがいけないということで、それでは、じゃ川口なら川口で何年か養成して、それを送り帰して、向こうで鋳物なら鋳物をやってもらおうと。で、日本の仕事もそこでやってもらえれば一番いいんじゃないかということが一つの発想だったわけですね。ところが、向こうへ帰って、鋳物工場をやって成功している人もいます。それから、全く落ちこぼれちゃって、全然違う仕事についている人もいます。まあこれはしょうがない、向こうの事情ですから。ただ、基本的な考えとしては、あくまでも1年なら1年、2年なら2年預かって、きちっと教えるものは教えて、しかも向こうへ帰して、向こうで同じように仕事をやってもらう。で、こちらから仕事もまたあっせんしてあげようと、これが一番の基本だったわけですね、鋳物業界としてはね。

○落合委員

そうしますと、鋳物づくりのまちの伝統をつなぐというお話がありましたけど、その一番基本的に望ましい形は、川口市の中に住んでいる日本人が主として勤めて、そこでつくって売るという形なんでしょうけど、今後はむしろ、産地は外で、それを持ってきて売りさばくのは川口市で、川口市ブランドとして行うことになるというようなことも進むのでしょうか。ものづくりのまちと言っても、仕組みはそういう新しいものにちょっと変わってくるっていうようなことがあるんですかね。

○小嶋氏

そうですね。ですから、本音を言いますとね、最初は人手不足、労働者不足だったから、それを補うために来てもらった。ところが、それがいけないということになって、正規に認可してもらうためには研修制度じゃなくちゃいけないということになって、研修になったんです。できれば、研修を受けた人は向こうへ帰ってもらって、向こうで鋳物なら鋳物業をやってもらおう。こちらでできないものを向こうへ持って行って、つくってもらって、またこっちへ戻してもらおうわけです。これが一番の基本だったんです、基本は。

ところが、それがいろいろ乱れますから、向こうへ帰っても鋳物をやらない人もいます。それから、今度向こうでかなり成功しちゃってね、逆に、日本が下請け的になっちゃっているケースもままあるみたいですよ。向こうの企業が立派になっちゃって。そんなようなことがありますけど、基本的にはそうなんです。基本的には、日本の技術を学んでもらって帰ってもらって、向こうで鋳物業を起こしてもらおう。しかも、日本でできないものを向こうへ持って行って、やってもらおうという、これが一番の鋳物業界としては基本だったわけですね。

○落合委員

そういう形に変質した形でのものづくりのまち川口と、こういう形にならざるを得ないということですか。

○小嶋氏

そうですね。ただ、今ね、ひとところに比べてね、ものづくりをやりたいっていう子供さんが前と違って結構、増えてつつあるんですよ。昔はいわゆる3Kといってね、「きつい」、「汚い」、「危険」といって、もう黒くなるのを嫌がっていた人が多かったでしょう。ところが、今、結構ね、自分たちたちがものづくりをやりたいっていう子供さんが前に比べれば、こんな伸びじゃないですけども、少しずつは増えているみたいです、学校の先生に聞いてみますとね。

○野村総研

すみません、お時間のないところを、1点だけ。神尾さんの最初の質問にもあったと思うんですけど、ものづくりの精神というか、誇りっていうのを今後も大事にしたいっていう方がいらっしゃると、この部会でもそういう話はよく出てきまして、今日もそういう話だったと思うんですが、私もそこに大きな反対はないんですが、あえてちょっと意地悪な質問というか、違った観点で考えてみますと、東京都内とかにも近いということで、働き場は東京にもたくさんありますねという中で、例えば市のお金で1億円ありますというときに、今後も経済振興なり産業振興に結構、使っていくのか、あるいは子育てとか、あるいは安全安心とかに使っていくのかという、別にどっちかだけっていうのではないと思うんですけども、いろんな立場の方が当然いらっしゃると思うんですね。ですから、今までの市政のあり方で、別にいいとか悪いとか言うつもりはないんですが、やや産業振興寄りだったのかなという見方を、私なんか外部なので勝手に偏見を持って、思っておるんですが、今後のあるべき姿と言いますか、あるいは過去どうだったのかということも含めて、どのような見方をされているのかというところをちょっと教えていただければと思います。

○小嶋氏

確かに大野市長さんはもちろん鋳物関係、永瀬市長さんは鋳物関係じゃないんですけども、やっぱり周りの業界とかいろんな要望を受けられて、とにかく今までの鋳物ばかりじゃなくて、新しい産業も含めた新産業都市ということを言われました。それから、今の岡村市長さんも鋳物関係の出ですから、やっぱりものづくりなくして川口のまちづくりはないんだということを言われております。まさにそういうことで今、動いてます。動いてますけれども、やっぱりだんだん時代が変わってきますとね、そこに住んでいる市民の方の層が変わってくると思うんです。さっき、ここにも出てました、新市民とか、川口都民とかっていう格好で出てきますと、やはり川口のまちの中の雰囲気やっぱりものづくりからだんだん遠ざかっていくような雰囲気になってくると思うんですね。ただ、もちろん市長さんとすればね、今の岡村市長さんなんかもやっぱりまちの繁栄というのはものづくりなくして繁栄はないんだということを言い続けて、しかも、そういったことをずっとやってこられてます。だから、いいでしょうけれども、これが将来を考えますとね、やっぱり変わってくるような危険性、私が危険性って言っちゃいけないのかもしれませんが、そういう傾向はあると思いますよ。

だから、そこで頑張らなくちゃいけないのは、やっぱりものづくりをやっている我々がやっぱり頑張らなくちゃいけないと思うんですよ。ものづくりの大事さ、川口にはこういうものづくりをやり続けるためのいい条件がそろっているということを多くの方々に訴え続けていかないと、なかなかそう長くは、市長さんがだんだん変わってい

くとね、やっぱり産業都市がいつの間にかいわゆる住宅文化都市に変わる可能性はあると思いますよ。これは逆に言うと、川口の立地条件が恵まれ過ぎているからですよ。いわゆる東京が近いということとか、高速道路がちゃんとある、それから鉄道もきちっと入ってきている。非常に恵まれてますね。時間的にも距離的にも非常に都心から近いということとか、いろんな条件が恵まれているから、何でもここでものづくりをやらなくちゃいけないのというね、逆に言うと、そういう声が出始めているわけですからね。と思います、私は。

だから、逆に言えば、今がちょうど我々ものづくりの瀬戸際だと思うんですね。ここで我々ものづくりが頑張っってね、頑張っって、自分たちの利益ばかりじゃなくて、じゃまちに対して何ができるかということをやっぱり何かの形で示していかないと、ものづくりなんか要らないよということになりかねないと思うんですよ。だから、やっぱり川口のまちっていうのは、もちろん東京に近いから住宅があって当然なんだけれども、ものづくりがあつたればこそ、やっぱり川口のまちはいいだなんというね、何かそういうことを我々は責任持つてこれからやっていって、その次の代につないでいかないといけないのかなというふうに思いますよね。

だから、ひところ、昔の公害なんっていうのはもうとんでもない話でね、当然そんなのはもう出さないことは当たり前の話で、それだけじゃなくてね、何かこのまちが産業都市として、あるいは新しい形の産業文化都市として生き残っていくためには、産業人として何かやらなくちゃいけないことを考える必要があると思いますよね。これがやっぱり商工会議所の仕事だと思いますけど。あるいは、各業種組合の一つのやっぱり仕事でもあると思いますよね。

○金井部会長

もう8時になってしまいましたね。非常に盛りだくさんの話をしていただいたのではないかと思います。

○小嶋氏

早口で、何かあっち行ったり、こっち行ったりの話で申しわけなかったんですけど。

○金井部会長

ありがとうございました。また、逐語録ができましたら、聞き取れなかった部分を含めてですね、確認をさせていただければと思います。

○小嶋氏

そうですね、私もちょっと途中で言いかけてやめたこともありますので。

○金井部会長

補足していただいてもありがたいので、ぜひよろしくお願いします。

○小嶋氏

それと、ちょっと最後に1点よろしいでしょうか。すみません、私の性分で最後にちょっとお願いというか。川口都民、言葉がいいとか悪いとかは別にしてね、川口都民と新住民との関係ということがここにありますよね。それで、私はやっぱり古い言葉ですけども、「温故知新」ということを新しい市民の方にわかってもらいたいと思うんですよ。もちろん川口に来ていただくことはありがたいことなただけ。だけど、このまちは今までこういうことで発展してきたまちなんだということもね、ある程度はわかってもらいたいなと。だから、いわゆるものづくりがだめだという邪魔もの扱いにしないで、その中で、じゃいかにものづくりに残ってもらうか、ただし、こういうことをやってもらえれば、どうぞ頑張ってもらってくださいよという温かい目で見ってもらうためにも、新しく入ってこられた方々にぜひ「温故知新」ということをもう1回考えてもらえれば、ありがたいなという、これは願望ですけどね。

それから、もう一つは、日本にとってやっぱりものづくりは絶対必要なわけですよ。資源がない、狭い国で、人口もどんどん減ってくるわけですから、ものづくりは大事なんだから、しかも、その川口がいろんな意味でもものづくりに適しているわけですね、条件的にね。だから、いろんな業種が集まっているわけですから、そういうことをもう1回考えていただければなあと。もちろん、我々ものづくりとしては、きちっとやっぱり公害問題とかね、あるいは住民に迷惑をかけないとか、いろんなことをやらなくちゃいけないんですけども、その反面に、そういったことをやっぱりやっていたら、ありがたいなと、こんなふうに思っているわけです。

それと、話が अच्छ こっち飛んじゃって申しわけないんですけど。それから、これ議員さんに特にお願いしたいんですけど、議員さんの中にはやっぱり川口のものづくりの経営者の、もちろん悪いときもあったと思うんですよ、イメージっていうか、実際にね、経営者の、悪いところがあったと思う。ところが、今はやっぱりそこに働いている従業員さんよりも、むしろ経営者の方がかなり厳しい条件の中で私はやっていると思うんですよ。その辺をやっぱり議員さん方に古いイメージを捨ててもらって、いわゆる川口の悪い経営者のね。まして、今は社員と一緒に共生っていうかね、あるいは、言葉はあんまり使いたくないんですけどね、共生共栄っていうか、お互いにね、お互いに生きながらお互いに頑張っていくんだよという姿が絶対あると思うんですよ、昔の経営者に比べれば。その辺をぜひ議員の皆様方にわかっていただきたいなということをお願いをしたいと、こんなふうに思います。

とりとめもない話で、大変申しわけなかったんですけども、ちょっと結構、意外と時間がかかっちゃって、私も言いたいこともなかなか言えなかったんですけども、

ぜひやっぱりそういうことも含めて、これからまた皆さん方にいろいろ御理解をいただいた中で、自治基本条例ですか、これをまたつくっていただければ、ありがたいなということを最後をお願いをしたいと思います。ぜひ、ひとつよろしくお願いします。
今日はありがとうございました。

○金井部会長

どうもありがとうございました。